

---

# 風車 - かざぐるま -

寿々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

風車 - かざぐるま -

### 【Nコード】

N1197B

### 【作者名】

寿々

### 【あらすじ】

十三番隊朽木ルキア中心の話。ちょっと一護×ルキア寄り？

「どうしたものか・・・」

十三番隊、朽木ルキアは、自分の手の中にあるものを見て悩んでいた。

それは、少し前のこと・・・

「朽木ー！これ、お前にやるぞ」

ルキアは、十三番隊隊長浮竹十四郎に引き止められ何かを渡された。

「何ですか？これ・・・かざ・・・ぐるま？二つも」

「そうだ。お前に似合うと思ってな。欲しくなかったら他の奴にまわしてくれ。」

どうせそれは俺の貰い物だしな。ゲホッ」

ゲホゲホと咳き込む浮竹。

「大丈夫ですか！？隊長！」

「ああ、大丈夫。ゲホゲホ」

という訳で、ルキアは隊長に悪いかな・・・と思いつつ

一つ貰ってくれる相手を探していたのだ。

「誰に渡せばよいだろうか？」

「おー！ルキアじゃねーか。どーしたんだよ。六番隊になんか用か」  
気づけば六番隊まで来ていたらしく、声のするほうに振り返ってみると

阿散井恋次。六番隊副隊長。

（・・・恋次・・・か）

恋次が風車をまわす姿なんてとてもじゃないけど想像できない。

「なんだよ。人を馬鹿にした様な目で見てんじゃねーよ。」

「って、お前何持ってた？」

ルキアの手の中の風車に気づく。

「これか？浮竹隊長に貰ったのだけれど・・・。」

使い道が無いから他の人にあげようと思ってな」

「それで六番隊？隊長も俺も風車なんて必要ねーよ」

「だな。他をあたる。じゃあな、恋次」

「おう。またいつでも来いよー」

恋次に断られたため、次は四番隊を目指した。

五番隊は、隊長の藍染が反乱を起こし、出て行つたため  
今行ったら迷惑だろう、と止めておいた。

「ルキアさーん！今日はー！」

「！花太郎」

四番隊第七席、山田花太郎がこちらに向かって手を振る。

「どうしたんですか？」

「花太郎、風車は好きか？」

不思議そうな顔をして首を傾げる花太郎。

「風車ですか・・・？」

「そうだ。貰い相手を探しているのだが・・・」

ちよつと考えて、口を開いた。

「ごめんなさい。治療のときに持っているのはちよつと・・・」

「そうか。ならいい」

「はい、すいません」

「誤らなくていいのだが？」

「すいません！ああ！すいませんって言っちゃった！あれ？またす  
いません??」

歩くのが疲れたルキアは、十一番隊の隊舎の前で座っていた。

（やっぱり探すのやめて持っていようかな・・・でも、二つもいら  
ないし）

「ああー！！ルッキーだあー！！」

いきなり的大声にびつくと肩を揺らす。

「草鹿副隊長？」

「めっずらしい！どしたの？ルッキー？」

声のするほうに向いても十一番隊副隊長草鹿やちるはいない。

かわりに・・・

「更木・・・隊長？？」

「お前、朽木ルキアだな。なんでこんな所に「いいじゃん！剣ちゃん！ちよつとくらい」

十一番隊隊長更木剣八の声を、剣八の大きな肩から顔を覗かせたやちるが遮る。

「で、どしたの？お菓子持ってきてくれたの？」

すとん、とやちるが降りてくる。

「あ、えつと。これ、要りませんか？」

やちるの目の前に、風車を差し出す。

「なーに、これ？風車？風車だねっ！」

ぱあぁと顔を輝かせ、風車を見つめる。

「はい。よかったら、貰ってください」

「わーい！」

息を吹きかけて回そうとするやちる。でも、なかなか回らない。

「ルッキー。回らないよぉー？なんで？」

やちるの吹きかける息が強すぎるのである。

「まわんなーい！つまんなーい！ルッキー、あたしやつば要らないや」

やちるは風車をルキアの手に戻すと、剣八の両脇にいた斑目一角と綾瀬川弓親の頭を踏み台にして、肩に戻った。

（こんのクソガキ・・・！）（一角、落ち着きなよ）

「じゃーね！ルッキーばいばい！」

「あ！はい、さよなら！」

仕方が無いので、やちる達が向かった方向と逆に歩き出した。

「あーら！朽木じゃなあい？どーしたのよ。ヒマなら一杯付き合つてよ」

ばあつと歩いていたため、十番隊の隊舎まで来ていた。

「松本副隊長？」

「そーよ！さあさ、早くこつちおいで！」

と、なるがままに、ルキアは松本乱菊十番副隊長に引き込まれた。

中は、荒れに荒れ放題で、酒やお菓子の包み紙がそこいらに散らかっていた。

「さっきまで京楽隊長も来てたんだけどー。」

七緒が連れ帰っちゃってさあ！」

話によると、仲良く飲んでいたときに、日番谷隊長が七緒に告げ口して

怒った七緒が飛び込んできたそうだ。

しまった、京楽隊長なら貰ってくれたかも、と

ルキアはちよつとがっかりした。

「あんとき隊長が七緒呼ぶからですよーお」

「うるさい！仕事しろ！」

奥から怒声が飛んでくる。十番隊隊長の日番谷冬獅郎である。

「あのおー、松本副隊長。これ、要りません？」

「ん？どしたの？」

ルキアがおずおずと差し出したのは、赤と白の風車。

「風車？なつつかしー。朽木、よくそんなもん持つてんなー」

さっきまでなにも喋らなかつた檜佐木修兵と射場鉄左衛門が

二人そろつて風車を見る。

「お二人もよかつたら・・・」

ルキアは二人のほうに風車を差し出した。

二人は、押し付けられちゃたまらん、といった様子で首を振る。

「わしは書類を届けに來ただけじゃけえの」

と、射場は帰ってしまった。

「じゃ、俺も・・・」

「えー。もうちょっと飲んでいつてよお。修へえ」

後に続いて帰ろうとした檜佐木を、乱菊が止める。

なんかよく分からないまま取り残されたルキアは、日番谷の方を向いてみる。

「あー、朽木。それ、日番谷隊長にあげちゃいなさい！

見た目は子供だからきつとにあ・・・」

「松本！！！！」

本日二度目。ルキアの耳に日番谷の怒声が飛んできた。

あのまま十番隊にいたら、お酒を飲まされてしまっ、とルキアはそそくさと十番隊を後にした。

（十番隊って、もっとちゃんとした所だと思っていたのだが・・・）  
ちゃんとしていたのは、日番谷のおかげだったらしい。

（こうなったら、あやつしかおらん・・・）

ルキアは、今度は寅の方角に走り出した。

どん！

ゆっくり走っていたつもりなのに、誰かとぶつかった。

「お主、大丈夫か？」

「よ・・・夜一・・・さん」

目の前にいたのは、自分の顔を心配そうにのぞきこむ夜一だった。

「夜一様こそ、大丈夫ですか！？」

「わしは心配ない。それよりルキア、大丈夫か」

「は・・・はい！大丈夫・・・です！」

隣にいた二番隊隊長碎蜂は、ルキアをきつ！と睨んだ。

「これ、碎蜂。そんなに人を睨むでない・・・お？

ルキア、お主が持っているそれは風車じゃな？」

「は・・・はい！」

ルキアが夜一の目の前に風車を差し出す。

碎蜂はますます面白くなさそうな顔をした。

「要りますか？夜一さん」

「悪いが、わしはいい。碎蜂・・も要らんじやろ。そうじゃ！あいつにやってみてはどうじゃ？」

面白そうに手を叩くと、ルキアにこそつと耳打ちした。

「はい！今から渡しにいくこうと思っただけです！」

「そうか。じゃ、気を付けていくんじゃぞ」

「はい」

夜一と碎蜂はくるりとむきを変えて歩いていった。

いっちゃん最後に、ルキアはもの凄い殺気のもった鋭い視線を碎蜂にあげられた。

四番隊、救護詰所。

青い空を眺めながら、ベッドの上で、

黒崎一護はぼおっとしていた。

（静かだな・・・・）

藍染の反乱が治まったことで、一時期、ソウル・ソサエティは平和になった。

（もつと、もつと強くならなきゃ。これじゃとても藍染に勝て・・）

「一護！……！」

静かな病室に大きな声が響いた。

「うるっせえな！誰だ！」

「私だ！」

怒鳴りながら病室に入ってきたのは、はあはあと息を切らしたルキアだった。

息切れが少しおさまって、無言で一護のほうに近づき

「……」

無言で風車をおしつけた。

「あ？」

「だから！やる、と言っているのだ」

「いや・・なんも言っただけじゃねえか」



むっと、ルキアが顔を歪ませた。

「御託はいいから受け取れ！」

「へいへい。なんだこりゃ。風車？俺に？」

「一護は不思議そうな顔をして、風車を指でまわす。

「ま、ありがとな。遊子と夏梨にでもやっつく」

「ああ、そうしといてくれ」

会話が途切れた。

ルキアはベットの脇に座って、どう切り出してよいか迷っていた。そして一護もまた、風車を指で回しながら、どうしていいか迷っていた。

「じゃ、私は・・・十三番隊に帰る。浮竹隊長が心配しているかもしれないからな」

「そ、だな」

ルキアが部屋のドアの取っ手に手をかけた。

「ルキア！」

「・・・なんだ？」

「一護はちよつと恥ずかしそうに笑い風車を持ち上げた。

「ありがとな！」

ルキアがくすつと笑った。

「私こそ、ありがとう」

「？」

「え、つと処刑の時・・・助けてくれて・・・兄様とも、ちよつと仲良くなれたし・・・。一護のおかげ・・・だ。藍染に殺されかけた時も・・・世話になったな」

言葉に詰まりながら、しどろもどろになりながら

ルキアは顔を真っ赤にして、御礼を言った。

「じゃ、じゃあな！」

「おう！また来いよ！」

ばたばたばたばた・・・

「朽木！お帰り。風車を貰ってくれる相手はいたか？」

「う・・・浮竹隊長！どうしてそれを・・・」

帰ってきたルキアの顔を見るなり、笑ってそう言った。

「それくらい分かるさ。で、いたか？」

「は・・・はい」

「そうか、良かったな」

ルキアは照れるように笑った。

「朽木」

「はい？」

「何か、いい事あったか？」

「ええええ！？」

驚きのあまりに、ルキアが大声を上げた。

「ななな・・・なんですか・・・？」

「いや。さつきから嬉しそうだったからな」

「そ・・・そうですか・・・？」

ルキアが頬に手をあててペタペタ触ってみる。

（どうしたんだろう・・・私）

ふいに、一護の笑う顔が浮かんだ。

（え？え・・・ええええ！？）

ルキアが顔を真っ赤にして慌てふためく。

そんな様子を、浮竹はくすくす笑いながら見守っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1197b/>

---

風車 - かざぐるま -

2010年10月9日14時20分発行